



Title	役割語の翻訳手法
Author(s)	文, 雪
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69699
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(文雪)	
論文題名	役割語の翻訳手法
論文内容の要旨	
<p>本論文は、ナイダの翻訳モデルに基づき筆者が提案を試みた「役割語の翻訳のモデル」を用いて、文学作品からマンガ、アニメまでの各ジャンルの日本語作品に見る役割語の中国語訳を分析してきた。その結果、各ジャンルに通じて窺えたのは、翻訳の過程における「役割語」への意識が高くないという点にある。具体的には、次のような問題点が明らかにされた。文学作品の翻訳においては、役割語への配慮よりも、翻訳者自身のスタイルが優先される傾向が見られる。マンガ作品の翻訳においては、キャラクターの言語的特徴が対応されていない点が目立つ。アニメ作品の翻訳においては、キャラクターの言語的特徴を捉えたものの、起点言語と目標言語における人物像に対するイメージの違いに十分な意識を持っていない点が指摘できる。以下、各章で述べたことを簡単にまとめる。</p> <p>第1章 本章では、まず役割語の定義を確認し、特にキャラクター言語との関係を整理した上で、本論の研究範囲を明確に示した。次に、日本語の役割語の特徴及び種類をまとめた。日本語の役割語は他の言語に比べると表現手段が豊富であり、主な指標としては人称代名詞またはそれに代わる表現、及び文末表現が挙げられる。『<役割語>小辞典』では日本語の役割語の類型を立てている。次に役割語の翻訳研究に関して、特に日本語の役割語を取り上げるものを中心紹介した。金水(2015a)によれば、翻訳における役割語の実態に影響を与える要因を3つにまとめられる。その他、翻訳理論と方法論の選択も影響していると考えられる。</p> <p>また、本研究の研究対象ではないが、訳文を扱う際に関わるので中国語の役割語についてふれておいた。方言は中国語の役割語の言語資源として重要な位置付けを占めている。最後に、日本語作品の中国語訳をめぐる研究に目を向け、役割語の翻訳研究との接点を示した。</p> <p>第2章 本章では、まず翻訳の定義について述べ、翻訳論の主要な流派を概観した。翻訳研究に際し研究目的によって理論と方法論の選択が肝要であり、役割語の翻訳を取り上げる際もアプローチする角度により、異なる理論と方法論を選択することができる。次に、本論で選択する理論及びそれに基づいたモデルを紹介した。ナイダによる等価理論を根拠として、ナイダの翻訳の3段階システムに基づき、「役割語の翻訳のモデル」を提案してみた。このモデルも本論文を通して考察の基盤となるものである。最後に、考察の手法及び考察対象の選定基準を述べた。日本語のフィクション作品に見る役割語を考察の対象として、扱う調査資料は文学作品から、マンガやアニメまで含める。金水(2017a)で提示したキャラクターの重要度と役割語の使用状況に関する分類により、本研究は主にクラス2に属するキャラクターを考察の対象に選定するとした。</p> <p>第3章 文学翻訳は伝統的な翻訳学の焦点であり、様々な角度からアプローチすることが可能である。役割語はポピュラーカルチャー作品に多く活用されるが文学作品にもしばしば見られる。本章では、文学作品に見る役割語に注目した。具体的には、村上春樹の小説『海辺のカ夫カ』に登場する女性キャラクター3名のセリフを取り上げ、特に<女ことば>の使い分けにより伝えられた女性性の違いに目を向けた。筆者が提案した翻訳モデルを利用し、原文と訳文での比較を通じて、起点言語と目標言語間の人物像の移転が成立するかどうか検証してみた。</p>	

文学作品における人物像の繰り出しは会話文のみで成り立つわけではない。また、文学作品の翻訳の評価基準は多元的であり、役割語に対する分析のみでは不十分であることは言うまでもない。本章では、言葉づかいと人物像の結びつきという限定される範囲での考察を通じて、役割語の角度から、文学翻訳へアプローチの新たな可能性について私見を述べた。

第4章

本論では役割語の翻訳研究を考察の重点により大きく2種類に分けている。A類は、起点言語に現れた役割語をめぐる研究である。第3章の考察は、A類の考察に属し、起点言語である日本語に見る<女ことば>及び訳文における対応的な言語的要素について分析したのである。

B類の考察は、目標言語に現れた役割語をめぐる研究である。本章では、第3章と同じ作品及び訳文を用いて、B類の考察を試みたい。目標言語である中国語に見られた「四字格」という言語形式について分析を試みる。役割語の角度から「四字格」の使用を考察し、原文から訳文への人物像の「移転」にどういう効果を与えていたのか分析してみた。

第5章

文学翻訳と違い、マンガの翻訳は伝統的な翻訳学の焦点ではない。20世紀80年代後半からマンガが英語に翻訳されはじめ、世界各国への発信が盛んに行われるようになった。中国では、マンガとアニメと一緒に扱うことが多く、「动漫（アニメ・マンガ）」という用語が作られている。中国におけるマンガ・アニメの受容は、マスマディア時期、海賊版時期、ファンサブ時期を経て、今はウェブサイト時期を迎えていた。受容の拡大に伴い、マンガ・アニメ文化に関する研究も進められている。しかし、マンガ・アニメ文化への関心が高いものの、数多くの研究の中に、マンガ・アニメの翻訳の質に焦点を当てるものが少ないのも現状である。マンガ・アニメの翻訳に関する研究はまだ始まったばかりの段階にある。

キャラクターのセリフを基本としてストーリーが構成されるマンガは、文学作品よりも、人物像の繰り出しにおける役割語の働きが大きいと思われる。本章では、マンガ作品に見る役割語に注目し、具体的には、岸本斉史によるマンガ作品『NARUTO-ナルト-』にみる<老人語>を取り上げた。

第6章

本章では、アニメ作品に見る役割語及びその翻訳に注目した。アニメの翻訳は映画の翻訳と同じ、「吹き替え翻訳」と「字幕翻訳」の二種類に分けられるが、本章では「字幕翻訳」を取り上げた。本章では、役割語の角度からアニメの翻訳について考察した。アニメ作品に見る猫言葉「ニャ」は及びその中国語訳「喵」に注目し、筆者が提案した翻訳モデルを利用し、原文と訳文での比較を通じ、起点言語と目標言語間の人物像の移転が成立するかどうか検証した。

本論文で明らかにできなかつたことは多々ある。各ジャンルに対しては、代表として作品を一つずつ取り上げているので、調査範囲を拡大して、ジャンルごとに役割語の翻訳について考察を深める必要がある。本論文で考案した「役割語の翻訳のモデル」についても、実証研究が課題である。また、目標言語にある役割語資源は翻訳においてどう役立つかについても、役割語の翻訳研究の一環である。今後、中国語の役割語の実態の解明にともない、翻訳研究との関わりを明らかにしていきたい。

金水敏(2015a)「役割語とその翻訳について」定延利之(編集)『私たちの日本語研究—問題のありかと研究のあり方一』

朝倉書店 pp128-132

金水敏(2017a)「言語——日本語から見たマンガ・アニメ」山田獎治(編)『「マンガ・アニメ」で卒論を書く』ミネルヴァ書房

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名(文雪)		氏名
	(職)	
論文審査担当者	主査 大阪大学 教授	金水 敏
	副査 大阪大学 教授	岡島 昭浩
	副査 大阪大学 教授	浅見 洋二
	副査 大阪大学 准教授	岸本 恵実

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 役割語の翻訳手法

学位申請者 文雪

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	金水 敏
副査	大阪大学教授	岡島 昭浩
副査	大阪大学教授	浅見 洋二
副査	大阪大学准教授	岸本 恵実

【論文内容の要旨】

本論文は、フィクションの台詞に現れた役割語的な要素をどのように翻訳に生かすかという問題を取り扱ったものである。主に、日本語作品から中国語への翻訳のケースを取り上げている。役割語とは金水敏が2000年の論文や2003年の著作で提唱した概念で、特定の人物像と深く結びついた話し方のパターンのことである。

構成は、「序章」「第1章 役割語の翻訳研究の前提」「第2章 役割語の翻訳へのアプローチ」「第3章 文学作品における役割語の翻訳」「第4章 役割語は文学翻訳においてどう役立つか」「第5章 マンガにおける役割語の翻訳」「第6章 アニメにおける役割語の翻訳」「終章」の8章からなる。巻末に、引用資料と参考文献のリストを持つ。

序章では、本論文の目的を述べ、各章の内容を予告している。目的は、翻訳論の枠組み内で役割語の翻訳へのアプローチの可能性を整理し、理論とモデルを提示すること、および日本語から中国語への翻訳の実例研究を示すことの2点を挙げている。

第1章では、「役割語」の概念および日本語の役割語の特徴について整理を行い、併せて中国語の役割語についても触れ、最後に日本語作品の中国語訳をめぐる研究に目を向け、役割語の翻訳研究との接点を示す。

第2章では、翻訳の定義に触れ、翻訳理論の中でも特にナイダの等価理論を紹介している。さらにこの理論を援用して人物像の「移転」についての図式を提示している。

第3章では、日本文学の中国における翻訳事情に触れ、一定の人気を持つ村上春樹『海辺のカ夫カ』を取り上げることについて説明する。『海辺のカ夫カ』に現れる女性キャラクターの台詞を分析し、そこに現れる女性性の違いを計量的に示している。また中国語における女性的表現、特に語氣助詞の用法に触れ、原作の女性性の違いが中国語訳において反映されているかどうかを検証している。

第4章では、中国語のフィクションでしばしば知識人のキャラクターを示す標識として用いられる「四字格」を取り上げ、『海辺のカ夫カ』のミミとトロの台詞に現れる四字格の効果について述べている。

第5章では、日本のマンガ作品『NARUTO—ナルト—』の老人キャラクターの台詞を分析し、そこに現れた〈老人語〉の要素が中国語訳に反映されているかどうかについて検証している。

第6章では、アニメ作品『ログ・ホライズン』シリーズの「にゃん太」という猫キャラクターを取り上げ、その台詞に現れる「ニヤ」というオノマトペ由来の成分について分析し、さらにその中国語訳で「喵」が当てられていることの効果を検証している。その結果、日中の猫文化の違いから、猫言葉「ニヤ」を一律に「喵」と訳しては、キャラクターのイメージを壊す恐れがあるため、訳語として用いる際のルールに関しては検討の余地があるとしている。

終章では、ここまで内容をまとめている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、役割語に着目することが如何に翻訳の質向上に寄与するかということを、理論的・実証的に検証している。理論面では、ナイダの等価理論を援用し、役割語の翻訳とは原作の発話の分析から人物像を割り出し、その人物像をターゲット言語の表現によって「移転」することであると明確に定義して見せた。実証面では、この理論的枠組みを活用して、小説作品『海辺のカフカ』の女性キャラクターの台詞や、知識人キャラクターを表すとされる「四字格」の効果、マンガにおける老人語の翻訳の効果、オノマトペをもとにした猫言葉の効果等について分析している。全体的に論旨が明快であり、理論的枠組みもしっかりとしている上に、計量的な調査では大量の言語資料を綿密に分析しているなど手堅い面もあって、総体として説得力が高い。

しかしながら、本論文で扱われた役割語は、日本語においてはきわめて明瞭に特徴付けられているものの、中国語の側では相対的な傾向差しかなく、場合によってはまったく無視しても翻訳が成り立ってしまうということが図らずもこの論文で示されてしまった。特に第4章の「四字格」では分析が功を奏しているとは言いがたく、また第5章でも結局老人キャラクター的な要素は中国語版ではまったく反映されていないという結論に至っている。とは言え、論者も述べているように中国語に役割語の表現が皆無である訳ではなく、方言を利用した発話でキャラクターが特徴付けられることはすでに先行文献で示されており、また呼び掛け表現のヴァリエーションなど、役割語からずれるところでキャラクターが間接的に表される場合も多く、この論文ではあまり取り上げられていない要素にも今後は目を向けていかなければならないだろう。

このように、本論文の範囲内では結果的に華々しい成果が得られたとは言えないが、その目的意識や理論的枠組みは今後の翻訳研究に大いに光を与えるものであり、論者自身や後続の研究者にとってきわめて有益であることは間違いない。すなわち、役割語に着目した翻訳理論とその実証の可能性を広げた点で、本論文の功績は決して小さくないと断言できるのである。以上の点から、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する次第である。